

『近世日本における儒礼受容の研究』

田世民著、ペリかん社、2012年

おやさと研究所教授
金子 昭 Akira Kaneko



まず、個人的な体験から始めることをお許しいただきたい。
5月中旬、私は国立高雄師範大学経学研究所主催の中華経学国際シンポジウムに参加した。経学とは儒学の經典研究のことである。同大学の経学研究所は中華圏で唯一の経学専門の研究機関というが、台湾ではこのような経学研究所が国立大学に設置されているのである。今回のシンポジウムでは、東アジア諸国から計26名の研究者が発表し、私も「日本の礼俗の背景にある死生観」というテーマで発表した。

シンポジウム翌日は、参加者有志で高雄市内の旗山孔子廟などを見学に行った。実はこの孔子廟は、市政府が建設したいわば高雄市立の孔子廟である（管理や案内はボランティアが行っている）。同市内では蓮池潭風景区にある台湾最大の高雄孔子廟が有名であるが、これも市政府の建設になる。台湾では各地に孔子廟があるが、現存最古の台南孔子廟は1665年に建てられた。ここは清朝末まで台湾の最高学府だったという。中華世界ではこのように儒教の伝統が途切れずに生きており、その思想や習俗も身近なものとして存在している。

さて、本書『近世日本における儒礼受容の研究』は330頁の力作研究書である。その核となるのは京都大学に提出された博士論文である。著者の田世民は、台湾新北市の淡江大学で教鞭を取る気鋭の台湾人研究者である。上述のような精神世界の中で教育を受けた田氏が、日本に留学して儒教儀礼の研究に志したのも、私は自分のささやかな体験から分かるような気がする。そうでなければ、近代以降はすっかり衰亡してしまった伝統的な儒家の喪祭礼について、どうしてこれほどまで情熱をこめて研究ができるだろうか。（田氏自身、祖母の喪葬儀礼に接したことが、この研究を志す淵源になったことを示唆している。）

本書の内容は、江戸時代の儒家知識人たちが、自らが学ぶ儒学思想を自らの生活実践にどう生かそうとつとめたか、とりわけ冠婚喪祭（田氏は儒家思想の場合、葬と書く部分にもつばら喪という文字を当てている）の具体的規範を定めた宋代の朱子（1130～1200）の『家礼』（『文公家礼』ともいう）をどのように受け止め実践しようとしたか、熊沢蕃山、浅見綱斎、また水戸藩や懐徳堂における礼学研究を詳細に調査分析したものである。

中国や朝鮮でも、時代が下るにつれて仏教式の葬祭儀礼が普及していき、儒家知識人たちはそれに対抗するべく儒家伝統の喪祭礼の再興につとめざるをえなかったが、日本の場合はとくに寺檀制度の下で、火葬を含めた仏教式の葬送儀式がそれぞれの菩提寺により仕切られ、儒家知識人たちの困難はただごとではなかった。そもそも「孝」を重んじる儒者にとっては、親の遺体を火葬にすることなど、全く許しがたい。したがって、近世の儒家知識人たちが朱子『家礼』を真摯に受け止め、これを制約された時代状況の中で生かそうとすることは、彼らが儒教の礼と精神を文字通り体現することであったし、またその中で大きな葛藤や格闘もあったはずである。本書は、いわばそうした江戸期の知識人たちの実践的取り組みを掘り起こそうとしたドキュメントである。

日本の風俗習慣は独特なものがある。朱子の『家礼』をそのまま取り入れるにはあまりに抵抗が大きい。熊沢蕃山は、喪葬

礼義の厳格な実施はかえって礼の基本に有害とみなし、むしろ状況に応じて柔軟に対応し、「慎終追憶」の誠意をこそ尽くすべきであるとした。そこに彼の火葬容認論も出てくる。これに対して崎門派、なかでも浅見綱斎は、自ら『家礼』の校訂出版や講義を行い、原則的立場を強調した。むろん火葬は論外であり、また異姓養子の禁止などにも限りなく厳格な順守を要求した。ただ、その綱斎自身には実子がなかった。しかし、彼は学問の信念を貫き、あえて養子を取らなかった（この厳しさは崎門派に共通する特徴であり、そこに人間としての葛藤もあったと想像される）。

また、水戸藩の徳川光圀は藩主として自ら儒礼に基づく施政を敷き、藩士たちにもそれを実行させた。これは彼が権力者だから出来たわけだが、そうした権力を行使できない民間学問所の懐徳堂では、菩提寺の僧侶と一種の緊張関係をはらみながら、儒教式の喪祭儀礼を行わざるをえなかった。

日本では、明治維新とともに儒学思想は時代遅れのものとして急速に廃れていった。朱子学自体が官学の位置からすべり落ちてしまったし、懐徳堂も幕府の庇護を失い、明治2年に145年の学窓を閉じざるを得なかった。

一方、『家礼』研究の影響を受けつつ、神職たちにより独自の神道様式の葬祭儀礼として編み出されたのが神葬祭である。神葬祭は、明治以降は政府の認可を得て一般社会にも普及していった。儒教儀礼と神葬祭とはたしかに別種のものであるが、その派生的影響関係からして、形を変えて儒家の『家礼』喪祭礼が存続していったとも見なすことができるかもしれない。してみると、田氏はとくに明言していないが、儒家儀礼は近代日本にも受け継がれていると言えるのではないだろうか。

本書の構成は次の通りである。

序論 近世日本の儒礼実践—東アジアの視点から

第1章 熊沢蕃山の儒礼葬祭論と『葬祭辨論』

第2章 崎門派の『文公家礼』に関する実践的言説

第3章 浅見綱斎の『文公家礼』実践とその礼俗観

第4章 水戸藩の儒礼実践—『喪祭儀略』を中心に

第5章 懐徳堂における儒教儀礼の受容—中井家の家礼実践を中心に

第6章 懐徳堂の儒礼祭祀と無鬼論

結論 儒礼実践において思想を生きる知識人たちの諸相

補論1 江戸日本における儒礼実践の中の論語

補論2 中井竹山・履軒の礼学についての一考察